ことしの牡丹はよい牡丹

ぼたん

海老名香葉子

ことしの牡丹はよい牡丹

海老名香葉子

主婦と生活社

〈著者紹介〉

海老名香葉子（えびな　かよこ）

昭和八年十月、東京生まれ。昭和二十年の東京大空襲の際、祖母、両親、兄二人、弟一人の家族六人が死去。

その後、三遊亭金馬（先代）師匠にひきとられ昭和二十七年四月に林家三平と結婚。昭和五十五年、三平師匠死去後、弟子の林家こん平を初め、二十六名の弟子のおかみさんとして面倒をみながら、マスコミでも活躍中。

増位山（現小野川親方）のヒット曲「そんな夕子にほれました」で作詞家としても注目を集めている。また、長女美どり（タレント）、次女泰葉（シンガーソングライター）、長男こん平（落語家）の母でもある。

ことしの牡丹はよい牡丹　　定価一〇〇〇円

昭和五十八年五月五日　初版発行
昭和五十八年十月十五日　第十一刷発行　検印廃止

著者　海老名香葉子
発行者　村川修二郎
発行所　主婦と生活社
振替　東京〇一三六三六四

印刷所　松濤印刷株式会社
製本所　太陽印刷工業株式会社
(株)若林製本工場

東京都中央区京橋三丁目五番七号　〒一〇四
TEL　販売部(五六二)二六五一　編集部(二七一)一五三〇

© Kayoko Ebina, 1983 Printed in Japan
(落丁・乱丁本は，お取替えいたします)

ISBN4-391-10660-4

本書の内容を小社に無断で複写複製することを禁じます

ことしの牡丹はよい牡丹　目次

一章　嫁入りまで……9
竿忠の家　9
学童疎開　17
火の涙　26
金馬師匠　37
二章　嫁・妻・母として……49
嫁入り　49
新婚生活　54
貧乏時代　59
長女の誕生　65
夫の初仕事　70
三章　落語家のかみさん……75
真打ち昇進　75

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

夫は売れっこ 78
夫の浮気 84
おかみさんと呼ばれて 94
ユニークな弟子たち 96
弟子もわが子 106
弟子教育法 111
四章 わが家は大家族 117
待望の家 117
おひなさま 119
子供と自転車 126
金属バット 127
おしゃべり〝虎の助〟 131
お父さんは偉い人 138
わが家の一日 140

お料理大作戦 148
珍客騒動 153
金馬師匠の死 160
五章　夫・三平の周辺 …… 163
なくて七くせ 163
思春期の子供たち 169
こん平の真打ち昇進 174
娘の結婚 178
嘶家の社会 186
林家正蔵と〝新作落語〟 189
三平落語 192
友人たち 196
六章　夫そして姑の死 …… 201
突然の脳内出血 201

リハビリテーション 206
ガンを宣告されて 213
座って大往生 221
姑のこと 222
七章　巣立って行った子供たち …… 229
出発 229
弟子たちとの誓い 231
子供たちの巣立ち 234
さよなら、白いベンツ 246
自立は作詞から 248
善意に支えられて 252
あとがき …… 259

装丁　長尾　みのる

ことしの牡丹はよい牡丹

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

一章　嫁入りまで

竿忠の家

本所三ツ目通り。押上方面から三之橋を渡って右側が堅川三丁目。

わたしはここで生まれ、ここで小学校五年まで育ちました。生まれたときから三の字に縁があったんだわ、と思っています。

お隣はふとん屋さん。裏隣はフォードという大きな自動車の修理工場。三ツ目通りを渡って二百メートルも行ったところに菊川小学校——わたしのなつかしい母校があります。小学校の近くには小さな公園があり、ここはいつも子供たちが遊びほうけているところです。その公園の前に通称百軒長屋があり、その角の煙草屋のおばさんの明るい顔が、いまだに目に浮かびます。

朝、広いアスファルトの三ツ目通りには、馬や牛の糞がたくさん落ちていて、狐が人間をだましし、あの糞を食べさせたんだという流行歌を、子供たちは親たちから聞かされていました。そ

の、だました狐の歌を思い出します。

おとっつぁん
今帰ったコーン
おみやげあげようか
温かい酒まんじゅう
コーン

学校から帰る頃には、この糞は近在のお百姓さんの畠の肥料にでもなるのでしょうか、きれいに拾われて跡かたもなくなっていました。

朝の静けさとは打って変わって、活気づいた大通りには馬や牛の曳く大きな荷車がたえず往き交い、その間を箱型の自動車が、押し分けるように、ちょっと威丈高な感じで走り去ります。また、リヤカーやサイドカーのおじさんたちは、鉢巻姿で傍目にも一生懸命汗を流して働いていました。とにかく、ここ本所三ツ目界隈は、とてもせわしなく賑やかで、働く人たちで生き生きした町だったのです。

わたしの家は代々釣竿師でした。三ツ目通りの角から二軒目で、間口六間（十・八メートル）、奥行四間（七・二メートル）の家です。二階の手すりの前には、ぶあつい立派な板に、大きく力強い字が彫りこまれた「竿忠」の看板が、掲げてあったのを覚えています。

店の広い仕事場では、祖父と父がいつも竿づくりをしていました。常連の客が三、四人上がり端に腰をかけ、その仕事ぶりを無言でじっと眺めているのが、毎日の店の風景の一つでした。竿師の家業がスタートしたのは五代ぐらい昔で、「竿忠」の屋号を掲げてからは祖父で二代、父で三代めということになります。

曽祖父は明治の人で、名人とまでいわれたそうです。パリ万国博覧会に和竿を出品して最高級の銀盆をいただき、一躍有名になったようで、わたしの物心つく頃は下町の職人ながら、けっこう華やかな毎日だった印象があります。

曽祖父の血を受け継いだ祖父や父の仕事ぶりは、子供心にも有無をいわせない気迫を感じさせました。短めの着物にたすきがけで、仕事中ほとんど口をきかず黙々と竿つくりに励む姿には、幼いわたしにも、「偉い人なんだなあ」と思わせる風格がありました。

祖母は、神田の小柳亭という講釈場と寄席の小屋主の長女で、その界隈では飛びきりの美人という評判の娘だったそうです。わたしも「おばあちゃん」と呼びかけながらも、不思議なくらいきれいな人だと思っていました。

母は木場の材木屋の長女で、父とは菊川小学校での同窓生。父が猛烈に母に惚れて、たっての願いで嫁いできてもらったそうで、父の一世一代の大恋愛だったことは、家族の間でも言い伝えられていたのです。

店には、世間に名を知られる人が客として出入りしていました。中島飛行機社長の中島知久平、歌舞伎役者の先代市川海老蔵、落語家、講釈師から陸軍大将まで、そうそうたる人たちで

す。

そういえば、子供心にも珍しかったのは、相撲とりの出羽獄文治郎さんでした。相撲の中でも大男だったこの人は、店にきていて昼になると、天井を軽く三つもたいらげてしまい、自動車に乗ろうとすると傾いで倒れそうになるので、驚いたものです。

こういう人たちが店にくると、たちまち店の前は見物の人がわっと集まってきますから、家の中からその人だかりを眺めているのが、なんとなく浮き浮きして、ちょっと自慢したくなるようないい気分でした。

「あさりからしじみよー」

遠くに近くにと聞こえる、もの売りの声から朝が始まります。

祖母が長火鉢の端で、キセルの吸いがらをはたく音で、母がすっと起き、シャッ、シャッと手早く、着物とかっぽう着を身につけ、髪を撫でつけながら、あわてて下へ降りて行きます。

間口の広い家の雨戸をゴトゴト開ける音、はたきをかける音、掃き出す音、丸い大きな卓袱台をギイギイ脚を出して組み立て、お茶碗やお皿を置く音。まな板でトントン、トントン……の頃には、ご飯をおはちに取る匂い、そしておみおつけの香りがプーンと。

一日の生活様式も明治以来のしきたりどおり、型が決まっていたものです。祖父母が睨みをきかせていて、店の仕事は祖父が、家内の取締りは祖母がとりしきっていました。

朝脱いだ寝巻やふとんのたたみ方、しまい方、洗顔、朝食など、子供たちもちゃんとしないと叱られます。母は色白の頬を赤くして、きゃしゃな体をきびきびと動かして、朝の秒刻みの忙し

さをこなしていました。

わたしたちが

「行ってきます」

と、次々に学校へ出かける頃には、入口に敷きつめられた玉石は、水で洗い清められています。四人も子供がいるので、部屋は散らかっていましたが、店の中は朝晩塵一つなく掃除されていたのです。

わたしは、兄妹四人の末娘でした。

長兄が両国のヤッチャ場（青物市場）の隣の中学に入学した日のことです。家では赤飯をたいて祝いました。

二階から降りてきた兄は、金ボタンのついた黒の学生服に、折目の筋がピーンと通った長ズボンの姿でわたしの前に立ち、

「かよ子、似合うだろう」

と、ちょっと気どって言いました。

「兄ちゃんおめでとう、とってもよく似合うわ」

「ありがとう」

兄は得意顔でした。

祝膳の前に座って、料理を食べ始めた兄は、ズボンの線がくずれるのが心配らしく、何度も手で筋をつまむしぐさをくり返しています。

夜になるとふとんの下で寝押しをしているので、わたしが
「兄ちゃん、中学生になると大変ね」
と言うと、
「偉い人を見てみな、みんなズボンの筋がピーンとしているから」
と聞かせてくれました。それからというもの、わたしはズボンの筋がなぜか気になって仕方がありません。
次兄は病弱で、いつも本を読んだり、父に買ってもらった顕微鏡をのぞいていました。兄妹中で一番頭がよく成績がいいので、両親は必ず他の子供を叱る際、
「すこしは竹ちゃんを見習いな」
と、引き合いに出しました。
「かよ子、かよ子」
と呼んで、本を読んでくれたやさしい兄でした。
三男で、わたしのすぐ上の兄の喜三郎は、近所中の評判の腕白で、いつも子分を十人ぐらい引き連れて、公園や街の辻でたむろして遊んでいます。
ビー玉も、ベーゴマも、メンコも一番うまく、喧嘩も強かったので、泣かされた子供の親がねじこんでくると、父はにがにがしい顔をして聞き、母は畳に額をつけて謝るのが常で、
「喜三郎には、困ったものだ」
とため息混じりに言うのが口ぐせでした。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com